

[研究ノート]

南原繁の価値論と「神々の闘争」

—「価値並行論」への注釈—

村 井 洋

はじめに

- 1 価値並行論の現代的意義と課題
- 2 「神々の闘争」の思想状況
- 3 「闘争」か「並行」か
- 4 デイレマに対向して

はじめに

本稿は、日本の政治哲学の創始者である南原繁（1889～1974）の「価値並行論」について、M. ウェーバー（1864-1920）の「神々の闘争」概念における価値論を参照点として考察しようとするものである。価値並行論は真、美、善に加えて、正義という価値理念が等価に人々と社会を嚮導するという南原政治哲学の中心概念である。M. ウェーバーを取り上げた理由は、彼が20世紀を代表する社会学者であることにとどまらず、南原繁自身が自ら価値論への関心という観点から、ウェーバーに独特の期待を以て臨んでいたと考えられるからであり、さらに、20世紀初頭の思想世界並びに現実世界に高まってきた価値論への関心を共有していると考えられるからである¹⁾。

1 価値並行論の現代的意義と課題

まず、南原の価値並行論の内容を確認するための手立てとして、十字型に交わる二つの直線というイメージでこの思想を表現してみよう。このうち水平の直線は「並行する」諸価値を表している。真・美・善と正義の四個の価値が水平に配置されている。ここに第五第六の価値が追加される可能性も排除していないと解されるが、南原の議論の中では、これら四価値にとどめられている。却って、大正期日本の代表的価値哲学者左右田喜一郎が価値のリストに加えた「経済的価値」は、南原においてはこの水平線より下に置かれ、「価値」の地位を与えられていない。また、宗教の位置はこれらが構成する水平線より「上位」にあると考えられるが、南原の『政治哲学序説』においては、必ずしも積極的機能を有するものとしては扱われていない。

一方、垂直の直線はダイナミックに上下運動するベクトルの性格を持つものであり、価値が現実実現されるに際しての人間の努力を表す。すなわち、価値理念とかわりながら、現実世界に価値ある文化財をもたらし、現実世界の事象を価値判断する。こうしたことが価値にかかわる具体的な成果と行為であるとされる。そして、人間（人格）は価値を求めて上向する存在であるから、二つの交わる点の下に置かれることになる。南原自身は

以下のように述べている。

さて、これらの諸々の価値に対応して、それぞれ広義の文化事象が存在する。すなわち「真」の価値に対しては学問、「善」に対しては道德、「美」に対しては芸術、および「正義」価値に対しては政治事象がある。言い換えれば、人格としての個人は道徳的価値の善に関係し、人間の労作または作業としての学問および芸術が論理的および審美的価値としての真および美に関係する。そして、これらの価値形象はお互いに並列関係にあって、その一つが他に優位するものでない。（南原繁『政治哲学序説』121頁）

価値リストの中に「正義」を含めたことが、南原思想の特徴である²⁾。

しかも、われわれの主題とする政治的価値についても、その固有性を認め、他の諸価値と並行の関係において考えようとしたのは、私の解するが如くんば、同じくカントであると思う。しかし、彼にあっては、(中略=引用者) いまだに不十分な状態にあり、政治価値の特有な客観的基礎づけは成し遂げられていない。それには当時、個人主義的啓蒙の思潮にあって、いまだ社会共同生活の強調されなかった時代の制約が考慮せられるべきである。(中略=引用者) しかるに、カントをかように理解し、政治的価値をその固有性において捉え、他の絶対価値と相並んで確立する理論は、いわゆる新カント派の人びとの間にもいまだ成されていないと思われる。(南原繁『フィヒテの政治哲学』150頁)

ここに、南原自身の、正義価値に注目した先駆性の自己意識と、南原が正義価値を、高まりつつある社会共同生活への関心に伴って導入した動機が読み取れる。また、カントが抱いていた個人主義的啓蒙思想が、社会共同生活の在り様を十分に理論化でなかったことへの批判意識も明らかである³⁾。

このことを念頭に南原価値並行論の特徴を確認しよう。その前提としてまず、哲学史上では少なくともプラトンまで遡り、カントにおいて高められた、存在と当為の区別、そして、これに対応する形での価値領域の立ち上げがあったことに留意しなければならない。その上で、南原価値論は第一に、上記したように、真善美に加えて正義が、価値として並列的に扱われていることである。南原の主著というべき『政治哲学序説』においては特に正義に焦点が当てられる。南原は「正義」がカントをはじめ、新カント派など、近現代政治思想ではまともに扱われていないことを踏まえて、自らの中心的課題に据えている⁴⁾。確かに南原は、「正義とは～である」という言述様式を以て正義の定義を与えていない。「正義とは形式」であり、強いて内実を捜すとすれば「平和」に結びつく。南原にとって正義は平和的調和であった。一次大戦を経験した南原が、パリ不戦条約(1928年)と時期を同じくして政治哲学を講じたのであった。当時国内では資本主義の発達に伴い労働運動が激しく蠢動し、社会問題への抜本的対策が必要であるとの認識から、労働組合法の原案起草にエネルギーを費やしたことは内務省時代の若き南原の経験したところであった。

思想的な瞥見を加えれば、古代・中世の古典的自然法概念の凋落以来、正義概念を真っ向から取り上げる思想家は現れなかった。資本主義に対応する経済倫理を求めるとすれば、功利主義に行きつくが、後にJ. ロールズが『正義論』で鋭く批判したように、「最大

多数の最大幸福」で表現される原理は、「パレート最適」の財分配の無差別曲線の暗礁に乗り上げて、有効な分配原理を案出できなかつた。かかる思想的状況において、正義原理を政治社会の実践に対するガイドたる統制原理として打ち出したことは、意義を持つ。

第二に、カントにおいてすでにそうであったように、諸価値が分立している思想状況を当然のこととして受け止めていることである。近代以前、伝統的思想においては、神と教会に由来する権威、神聖価値あるいは救済価値が、他の諸価値を統制していたと考えてよいであろう。例えば福音書の有名な一節「野の花・空の鳥」は救済・神聖価値が「豊かな」食糧や「美しい」装いに増して（「これらのものは添えて与えられるであろう」）他の価値に勝って優越している例示として読むことが許されるであろう⁵⁾。

ところが、近代以降の社会は、神聖価値が背後に退くことによって、価値の分節化が顕在化した。一例を挙げれば、ルネサンス絵画に見られるように、描写の対象が聖書説話のように不変でありながら、描写の目的として美をそれ自体価値あるものとして独立させたのである⁶⁾。

第三に注目すべき特徴は、南原が、他の価値領域においては成し遂げられるとした、価値と存在の（垂直的）結合・統合が、政治においては完全な形では不可能であることを述べていることである。現実の国家、政治は遂に正義価値と完全な結合を成しえない。しかし、できる限り現実を価値に近づけてゆくことが課題であると述べているのである⁷⁾。

政治は価値と現実の分立を前提とし、現実を価値に近接させる努力としての理性的行為である。（『政治哲学序説』37頁）

南原がこう捉えた理由は、仮に「現実」が「正義」に一致することがあれば、それは、「正義」の名による全体支配に他ならないからである。現実世界に生きる人間にとって「正義」は常に目標であり続ける一方、決して終結しない道程なのである。「正義」によって社会を閉塞させれば、個々人の自由な実践は枯渇し、逸脱は厳しく罰せられる恐怖政治が現出してしまうことを南原は恐れたのである。

以上のような南原価値並行論は、見逃すことができない意義があると言えるであろう。それは、人間活動の文化的価値追求について、個人と共同体の、自由な選択の可能性を開くことであった。そしてさらに、政治領域における普遍的価値規範の存在可能性と、「正義」という政治固有の価値が、政治領域に対して統制的機能を有することの意義を明らかにしたことである。近代啓蒙思潮の発展と展開と並行して、政治領域の再神話化、再魔術化の動きも活発化したと言えるであろう。それは、戦前期日本に見られた、教育勅語とその背後にある国体論の伸長に見て取れることである。この動きがアジア太平洋戦争敗戦によって破綻すると、政治領域を導く理念と、政治活動を支える「理性」の必要があらたに自覚されることになった。南原の「正義」は言い換えれば、日本国憲法体制を支える、モンテスキューの語彙で言えば、「法の精神」あるいは「政体の原理」－政治を活性化し、息を吹き込むメンタリティー－であったと言える。

しかし、他方で、南原価値並行論には、南原自身も自覚していた、少なくとも二つの困難（課題）が内在しているように見受けられる。

問題点の一つは上述の垂直的な結合に関するものである。ここにある種のディレンマを

見出すことができるのであり、すなわち、上述のように、一方で、正義が現実と完全に結合してしまうと正義の全体主義化とでもいうべき事態が生じる。現実の国家が正義の体現者として絶大な権力を振るうようになるという、プラトンの理想国家論（『国家』）に南原が示した憂慮がそれである。しかし、他方、逆に、現実と正義理念が遠く乖離すると、正義の統制力が弱まってしまい、アノミー的な自然状態が現出してしまう。特に政治という人間の所業は、正義と権力追及の「二人三脚」であることを想起するとき、正義価値の薄暮は権力政治の跋扈と被治者の政治的無関心の同時並存状態を招いてしまう。

問題点の二つ目は、水平方向にかかわる。正義はもとより、「領域侵犯」的の性向を持つというべきであろうか。これによって正義が暴走し価値並行を壊してしまう危険性がある。逆に正義が弱くなり、喪失される場合は、他の価値によって政治が占拠されてしまう。前者の場合とは、前述した、諸価値に優越して正義価値が君臨する状況である。後者の場合とは、例えば政治の「美化」という事態であり、政治領域にある利害対立が無視され、紛争はロマン主義的に処理され、政治はナルシズム的になり、現実認識と対応に失敗し、自壊してしまうという事態である。また、政治が完全に道德化された暁には、内向した道德意識の横溢から、窮屈な信条倫理の政治が出現してしまうであろう。

一言でいえば、南原価値並行論は一方では正義の過剰な優越による「全体主義」的統制、他方では価値アナキズムへの融解、という両極の間に位置を置くことになる。

2 「神々の闘争」の思想状況

このように価値への並々ならぬ関心と、価値の分立状況の認識は、南原の政治哲学の基調となっているものであるが、この姿勢はやや位相をにずるとはいえ、マックス・ウェーバーの社会科学の基調でもあった。

南原の少ない引照例に見えるウェーバー評価は、専らウェーバーが価値関係性に基づく社会現象を学問的に把握したことへの肯定的評価である。以下のウェーバーへの言及から「理念型」という方法手段を踏み超えてさらに価値論を見届けようとする熱気を感じることができる。

それが人間行為の意味の省察を要請する限り、たといそのことが人間行為の客観的説明のための媒介であるにしても、もはや本来の社会学的見地とは相容れない他の見地を予想するものと言わなければならない。なぜならば、「意味」とは価値目的を前提とし、したがって没価値的な認識体系とは本質的に異なる思惟体系を予想して初めて可能となるからである。（中略＝引用者）しかし、彼が意味理解の図式として使用する「理念型」（Idealtypus）は目的合理的な行為の典型を指すのであって、それは先験的理念体系を前提として、社会的行為は内容的にこの目的体系に適合する限り、意味を理解しようというものである。そして、それは根本において客観的な価値目的体系を予想して初めて可能な思惟方法といわなければならない。（南原繁『政治哲学序説』378頁）

南原にとっては、意味の背後には、「客観的価値体系」すなわち行為者の時々の意識を越えて定在する価値のシステムがある筈だからである。価値並行論を基調として自らの政治哲学を構築しようとする南原の眼には、ウェーバーの中に自らの価値哲学と同じ志向を、

「人間行為の客観的説明」のためと留保をつけながらも、見届けたように思えたのである。

価値は言うがごとき単なる主観的判断や信仰にとどまるものではなく、われわれは価値論理的な客観的体系を考えることができる筈である。(中略=引用者)ここに、われわれは全体の価値体系を考え、その中において政治的価値がいかなる位置を占め、他の諸々の価値といかなる関係に立つかを究明しなければならない。(『政治哲学序説』著作集第5巻、19頁)

南原の見るところではウェーバーの価値論は曖昧なところがあり、それは価値を客観的・「絶対的」「實在」として、実践の目標であると考えているとまでは断言できない。ウェーバーの価値論が、価値を客観的存在として実践的に生きる－南原自身の価値並行論がそうしたように－ことに踏み込むものではないとすれば、このウェーバー評価は南原自身の価値論に照らして、後退した地点からの評価であり、得心のいくものであったかは疑わしいと言えよう⁸⁾。

一方、マックス・ウェーバー自身が価値論を端的に表したものとして以下の言説が有名である。

純粋な経験から出発すれば多神論にたどりつく、とミルは言っています。これは味気なく定式化されていて、逆説的に聞こえます(中略=引用者)あるものが美しくないにもかかわらず、というだけでなく、それが美しくないゆえに、そしてそのかぎりで、そのあるものは神聖でありうる。『イザヤ書』53章⁹⁾と『詩篇』21篇に、その例証を見つけることができます。また、何かが悪でないにもかかわらず、というだけでなく、それが善でないことで、それは美たりうる。(中略=引用者)何かは神聖でなく、美しくなく、そして善でもないにもかかわらず、そうしてそうで、あるものが真であることもある。(M. ウェーバー『仕事としての学問』65頁)¹⁰⁾

「神々の闘争」とは「美」「善」「神聖」「真」といった価値が、分立し、さらに、相互に対立闘争する関係にある事態を指しており、これをウェーバーは、上記引用にあるように歴史を通して見られる事態でありながら、他方では、近代的な「合理化」「脱魔術化」に随伴する現象であると考えている。「神聖」価値が背後に退き、世俗的価値領域それぞれに固有の「合理性」が前面に表れるという現象である。

この「神々の闘争」をウェーバーの学問的思考の中でどう解釈し、位置づけるかについて、いくつもの主張がなされている。有力と思われるものを検討することによって、南原とウェーバーの比較の参照点としたい。まず、レオ・シュトラウス(Leo Strauss, 1899～1973)によるものを取り上げよう。

シュトラウスは『自然権と歴史』(1953)－自然権がnatural right「自然的正義」を意味することは、本稿の文脈から注意しておくべきであろう－において、歴史主義に対抗して自然的正義が存在するという立場から、古典期から近現代まで、ヨーロッパ思想史を通観した。その第2章では、ウェーバーの政治思想がカントと歴史主義の影響下にあり、絶対的な価値に対して消極的に対し、その結果として、価値相対主義、ニヒリズムに陥ってし

まうという解釈を展開した。言い換えれば、価値の並立について自由主義的に対処しようとした結果、ウェーバーは決断主義を導いてしまったとするのである。但し、当のシュトラウスはこの著書のみならず、彼の著作全編を通して同様であろうが、「正義とは何か」について、具体的積極的な言明をなしていない。彼が古典的正義を肯定的に扱う場合も、古典的正義論が自己矛盾を露呈してしまうことを指摘してその箇所を議論を止めておくのである。

シュトラウスの言明についてさらに注目すべき点を一二挙示したい。「闘争」的な価値論への批判である。「神々の闘争」という認識はウェーバー自身が抱いていた、人間生活にとって闘争は不可避のものであり、平和と幸福は好ましい境位であるとは考えられないという、包括的な人間観の一部をなすものであるとする指摘である。根が深いというのである。しかし、とシュトラウスは言う、たとえ世界が戦争状態にあったとしても、個人の心の中にまで及ぶことがない筈である、平和は、ウェーバー（魂のない専門人、精神のない享楽人『職業としての学問』）やニーチェ（「僕たちは幸福というものを発明したのさ」『ツァラトストラ』）の終末人批判とは逆に、人間存在にとって根源的な意味を持つはずである¹¹⁾。こうしたシュトラウスの闘争観から、南原の主張と重なる部分を抽出すると、闘争の相克に生きるよりも、双方の価値を包括した場合によっては協調的な政治体制を選ぶことを妥当であるとするといえるのである。

ウェーバー自身の定言的命法の定式は、「汝のデーモンに従え」あるいは「汝の神またはデーモンに従え」であった。ウェーバーは悪しきデーモンを過小評価するという過ちを犯したかもしれないが、悪しきデーモンの可能性までも忘れていたと不満を述べるのは、公平さを欠くことになろう。（シュトラウス『自然権と歴史』74頁）

さらに、シュトラウスはこうも言う。

ウェーバーが西洋文明を展望して述べた言葉を、もう一度思い起こしてみよう。すでにみたように、ウェーバーは次のような二者択一の事態を見てとっていた。精神的再生か、さもなければ「機械的化石化」、すなわち「精神と見識を欠く専門家と心情なき享楽家」となる以外のすべての人間的可能性の消滅かという二者択一である。（シュトラウス『自然権と歴史』80頁）

ウェーバーと究極的価値という問題については、さらに、次のような記録がある。ハンス・シュタウディンガー（1889～1980）が発した、「あなたが拠り所としている究極的な価値は一体何か」という問いに対してウェーバーは「私を動かす究極的価値などありません」「ではあなたは一体どうして生きていけるのです」と問われて微笑みながらこう答えた。

一つこういう情景を思い浮かべて下さい。私の書斎の天井には、ヴァイオリンや笛、太鼓、クラリネット、ハープなどいろいろな楽器がつるされています。ある時にはある楽器が音をたて、ある時には別の楽器が鳴ります。ヴァイオリンが音を立てるとします。それは私にとって宗教的価値なのです。次いでハープとクラリネットの音色が聞こえま

す。そこに私は芸術的価値を感じ取ります。(中略=村井)時としてこれらの楽器は不協和音をかなでます。それをうまく調和させ、そこから一つのメロディーを生み出せる人は、もっぱら天分のある人だけ、つまり予言者や政治家、芸術家など多少ともカリスマにめぐまれた人間だけです。(ウィルヘルム・ヘニス『マックス・ヴェーバーの問題設定』241頁以下)

続けて自分自身について、こう語っている。

私は教師であり、ですからまた認識を使いものにできるよう按配する仕事をしていません。私の楽器は書棚のなかにあります。ところがこの楽器は「音を出し」ません。この楽器を使って生き生きとしたメロディーをかなでることはできないのです。(同書 241頁以下)

ここに表現されているのは、神々の闘争状況にも拘わらず、適材を得てアンサンブルが実現する可能性であり、しかしその困難さである。同時に、教師であり研究者であるウェーバー自身はそうしたカリスマの座に乗り出すつもりはないことの意味表示である。

ウェーバーの「神々の闘争」の第三の解釈として、野口雅弘氏によるものを取り上げよう。野口雅弘(2006)は「神々の闘争」を、ウェーバーの学問探究全般に亘る基本的な視座と考える。これは特に、比較文化研究において有効である。闘争における競合と緊張が、諸文化の特徴を際立たせ、特に西洋文化に見られる文化構造を解明する手掛かりとなるといえる。一例として、中国文化における闘争のあり方と西洋文化のそれを比較したウェーバーの研究が挙げられるであろう。中国文化における諸価値の融合化傾向は、諸価値間の闘争というよりも、諸価値を全面的に体现した官僚の官僚制システム内における出世競争という形をとらせるに至った。他方、西洋文化における価値競合傾向は、ビスマルク期に典型的なように、議会における権力闘争、国家を闘技場とした政党間の闘争という形をとるようになる、というものである。闘争概念を、実践的決断に先鋭化させるというより、文化社会学のカテゴリーとして利用するという、ウェーバー理解は、以下のカール・ヤスパースの把握と同類ともいえる。

最後に、カール・ヤスパースは自身のメンターともいべきマックス・ウェーバーを「政治家」「研究者」と並んで「哲学者」として捉えていた。「神々の闘争」はこのうち「研究者」としての立場に置かれるものであった。つまり、諸価値の並存についてのウェーバーの立場は社会学者としての認識であって、これらの価値統合などについては学問的な討究を行っていないというものである¹²⁾。

以上、マックス・ウェーバーによる時代の価値状況認識としての「神々の闘争」を後学の思想家がどう捉えたかを見てきたわけであるが、本稿の判断としては、まず、ウェーバーの価値論の立場と「神々の闘争」解釈としては、野口氏とヤスパースに代表される「学問的パラダイム」説を肯定したい。理由は、確かにシュトラウスの説はウェーバーの価値論の特性を鋭く切り取っており、そしてその「一可能性」を帰結にまで突き詰めた点で注目に値するが、思想家としてのウェーバー理解としては一面的であることを免れないからである。ウェーバーは「途中で死んだ」のであり、途上にあり続けることが身上であっ

たことを再認識することは取りあえず理由から除外するとしても、「神々の闘争」に対する学問的解決策を断念したことは、ウェーバーがカントの批判理性の末流として、学問的能力の限界に及ぶ言述には強い自制心を以て臨んだことの証左以上のものではなかった、と理解できるからである。従って、これですべてであると断定することはできない。ヤスパースはこう言っている。

それであるから、世界における諸可能性のあいだの解消できない闘争という生活状況は学問の方向を与える考察のすべてにたいしては究極のものではあるが、しかしそれは存在意識一般にたいする究極のものではない。ある見地のもとで合理的な究極のものが絶対的究極のものであるわけではない。マックス・ウェーバーが語っているばあい、彼は社会学的に語っているのである。（『マックス・ウェーバー』85頁）

しかし、本稿の目的は南原繁の価値並行論をウェーバーの価値論の示唆するところと比較して論じるところにある。この点から見れば、南原はウェーバーと同様に、価値分立の問題性を強く意識していたと述べることができるであろう。そして、シュトラウスが徹底化したような、価値分立が価値観闘争を経て、決断主義へと辿る道を選んできた道を選んだ－仮にそれが困難であろうとも－と捉えることができるのである。

3 「闘争」か「並行」か

価値の並立という思想状況を南原とウェーバーがどうとらえたかを、振り返りつつ、いくつかの観点から対照してみよう。

- ① そもそも、価値に注目する意義をどう考えていたか、については、南原は価値を文化としての政治領域が存立する根拠として考えており、正義という文化価値を目指した実践が重要問題であった。一方ウェーバーは、価値（「神々の闘争」）を、歴史社会現象を解明するための学、理解社会学を導く学問的概念として扱っており、自身の実践的指針として特定の価値を学問的な議論の俎上に載せることはなかった。
- ② 諸価値が分節しているという事態へのテキストの典拠は、南原は専らカント、特に三批判に求めていたと言ってよい。ウェーバーについては、F. ニーチェとG. ジンメルなどを挙げるができる。また、両者に共通したものとしてH. リッケルトからの影響も見逃せない。
- ③ 諸価値分立の歴史的背景としては、南原については日本の近現代史の政治的、経済的、社会的近代化を挙げることができ、ウェーバーにとっては、ドイツの政治的、経済的、社会的近代化に直接影響されながら、さらに全世界史的な視野へと広がりをもたせよう。
- ④ 価値論の実際は、これまで論じたように、南原は諸価値の並行を実践的に目指し、ウェーバーは諸価値の緊張に満ちた対立関係において、社会学的解明を行おうとしたと言えよう。
- ⑤ 価値分立状況への対処については、南原の場合は諸価値の並行の維持、特に正義価値の暴走に注意し、バランスをとることを重視していたと見てよいであろう。ウェーバーは（後にL. シュトラウスやK. ヤスパースが試みたように）哲学的理性による統合

や統制を断念していた。ただ諸価値観の緊張関係をバネに、価値（エートス ethos）に基づく諸文化の特性を解明し提示することに専念した。

- ⑥ 宗教的価値の位置づけに関して、南原は歴史的経験に照らして慎重であり、「メタ」価値の位置づけを与えられたが価値論の前面からは退いている。ウェーバーでは社会現象を解明する重要な手立てであった。

4 デイレンマに対向して

南原価値並行論は2節で述べたような問題点をいかに克服しようとしたのであろうか。

第一の問題点、正義理念の現実との不一致について。これは、実は南原が「正義」を「極限概念」として捉えていることに他ならない。すでに、左右田喜一郎が存在と当為の関係がいかにあるかを説明するに当たって用いた概念形態である。一方向に向かって無限に上向する運動であり、しかし、算術的な合計を以てしては到達することができない（ただある種の超越的飛躍によってのみ可能である）。方向性を持ち限界を意識した実践、そして（思考作業としての）超越が極限概念のメルクマールである。この概念の様相である無限の接近と乖離の同時存在を左右田は以下のように表現している。

当為と存在、価値と内容とを考ふる毎に、余は常に此の数学上の極限概念に想ひ到らざるを得ない。「極限概念としての文化価値」（『文化価値と極限概念』岩波書店、1922年／1971年、231頁）

第二の問題点、正義と他の価値との相互侵犯性について。南原は「文化価値一般」という概念を導入することで、価値間の均衡を実現できると考えていた。哲学的なテキストを辿ると、カントの『判断力批判』に行きつく¹³⁾。自然が人間に諸文化価値を発揮できる能力を与えているかのように見える。それゆえ、人間はこれらの能力を統合的に運用できるといふ考えである¹⁴⁾。

このように、南原自身価値並行論に内在するデイレンマを意識し、これを克服する方途を考案していた。但しこれが十分に説得的であるか、特に、多様な価値が社会的・政治的領域に登場するに至った現代的な価値状況に対応するに十分であるかはさらなる考察が必要であろう。そしてこの作業は、南原が『政治哲学序説』で展開を試みたような批判的理性の延長と「強化」による方法、を模索することに繋がると思われる¹⁵⁾。

注

- 1) 実は南原繁の著作ではM. ウェーバーへの言及箇所は『政治哲学序説』のただ一個所だけである。その記述は、南原の価値論への強い関心を表している箇所であると受け止められる。
- 2) ハインリヒ・リッカートは六つの価値領域を想定した。「真理」「美」「非人格的聖」「道徳」「幸福」「人格的聖」である（リッカート「価値の体系について」、九鬼一人『新カント派の価値哲学』弘文堂、1988年所収）。
- 3) 南原の『国家と宗教』（1942）では、個人主義的啓蒙主義が「真の意味における学問的知識に対する懐疑、客観的真理の喪失、およそ人間と世界との全体をつつむ文化理念の消失が、その精神的思想的特質である。」（岩波文庫版、24-25頁）に至るとされ、これが「神話的思考」に結びつくと論じら

れる。言わば、「啓蒙の弁証法」の道筋を見出し、分析・批判している。

- 4) 南原の『政治哲学序説』は1928年から4年間に亘って東京大学で行われた講義の記録を基にしている。国際組織の部分は後に書き加えられた（『南原繁著作集』第五巻、442頁「解説」）。
- 5) 「…野の花がどう育つかつぶさに見よ。苦勞せず、紡ぎもしない。繁榮の極みでのソロモンでさえその一つほどに着飾れなかった。きょうは盛りあす炉に投げ込まれる野の草とて神はこれほど装いたもう。…まず彼の国と義を求めよ。（『マタイ福音書』21 前田護郎訳、中央公論社）この個所に「明日のことを思い煩うな」というフレーズが添えられている。「思い煩い」はドイツ語訳ではSorgeであり、ハイデgger『存在と時間』（1927）では現存在の意識として扱われ、アリストテレス『ニコマコス倫理学』では思慮phronesisとして、精神能力中の高位の位置が与えられている。福音書の価値位階では、古典古代的な精神能力の評価が逆転されている例と読める。
- 6) ハーバーマス『近代 未完のプロジェクト』（三島憲一編訳、岩波書店、2000年）では、カント、ボードレルを引照しながら、この経緯が説明されている。
- 7) 南原はこの結合を行おうとして失敗し、遂には哲学体系自身の破綻を招いたとしてヘーゲルを批判している。さらにそこから、現実から理念への漸近的接近を含意する「極限概念」を説いた左右田喜一郎からの示唆が見取れる。

また、M. シェーラーの価値位階論については次の特徴を押さえておく必要がある。シェーラーによれば①価値はより持続的である程より高い②広がりや分割可能性とに関与する度合いが少ないほど高い③他の価値を基礎づけているほど高い④諸価値の感得と結びついて「満足」がより深いほど高い⑤より少なく相対的な価値であるほど高い。従って最高の価値は絶対的価値であり、頂点に位置づけられるのは「聖価値」である。水野雅彦（2003年）「シェーラーにおける価値認識への道」（『倫理学研究』14号）ならびに阿内正弘（1995）『マックス・シェーラーの時代と思想』春秋社、127頁以下。

- 8) 南原のヨーロッパ留学中の経験を聞き書きした『聞き書 南原繁回顧録』には、マックス・ウェーバーの名は現れない。聞き手の福田歙一と丸山真男からは、ウェーバーについての問いが発せられていない。この理由はまず、ベルリンに滞在し、専らカントの解説に専心していたことにあるのかも知れないが、前後に現れる人名との兼ね合いにおいてやや不自然な印象を受ける。
- 9) だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか。ヤハウエの腕は、だれに現われたか。彼は育った、ひそかなる芽生えのように、また乾いた地にある木株にも似て。見るべき容姿、輝きもなく、また慕うべき面影もなく、蔑まれ、世に捨てられ、病を知れる苦悩の人、顔をおおって避けられる者のように蔑まれわれらも彼を顧みなかった。……しかるにわれらは思った、彼は打たれる、と。あに計らんや、彼はわれらの不義のゆえに刺され、われらの罪科のために碎かれたのだ。彼の懲罰はわれらの平安、彼の傷痕はわれらの癒しのためであった。……しかるにヤハウエは、われらすべての罪科をかれに負わせた。……。

10) *Max Weber Gesamtausgabe*, Band 7, Tübingen, 1917/1992, S. 99.

11) レオ・シュトラウス（1952/2013）『自然権と歴史』塚崎・石崎訳、ちくま学芸文庫、100頁。

12) カール・ヤスパーズ『マックス・ウェーバー』樺俊雄訳、理想社、84頁以下。

13) カント『判断力批判』§82。また、加藤節『南原繁の思想的世界 原理・時代・遺産』（岩波書店 2016年）29頁。拙稿「南原繁と戦後西欧政治思想」（南原繁研究会『南原繁における学問と政治』横浜大気堂、2022年）56頁以下。

14) これは、ゲーテやフンボルトの「全人」、「教養」理念と対応するものと考えられる。

15) いくつかのバージョンが考えられる。簡略にそれらの方向を示したい。第一はヤスパースの「包括者」と「実存理性」に求められる。「正義」という精神的な営みの意義と限界を認めながら、これらの営みを実存から発出するエネルギーと理性の運動によって束ねようとする。最終的には「暗号解読」を行う「哲学的信仰」によって支えられる。ヤスパースと南原は思想のタイプにおいて類似しているが、ニーチェとキルケゴールによる問題意識をヤスパースは強く継承している。

第二はレオ・シュトラウスによるものであり、生活世界から出発しソクラテスの対話をこととしながら真理、正義価値と宗教的価値への上向を行うものである。

第三はユルゲン・ハーバーマスの行き方であり、理性の担い手を単独の主体から抑圧なき行為を目指すコミュニケーション行為へと転換させ、合意形成による理性的思考を実現しようとするものである。三者とも何らかの方法で対話的な理性を開発する点で共通点を有しているといえる。

引用・参考文献

南原繁『フィヒテの政治哲学』（南原繁著作集 第2巻）岩波書店、1973年。

南原繁『政治哲学序説』（南原繁著作集 第5巻）岩波書店、1973年。

Max Weber Gesamtausgabe, Band 17, Tübingen, 1917/1992.

ウェーバー、マックス『仕事としての学問 仕事としての政治』野口雅彦訳、講談社学術文庫、2018年。

シュトラウス、レオ『自然権と歴史』塚崎智、石崎嘉彦訳、ちくま学芸文庫、2013年。

ハーバーマス、ユルゲン『近代 未完のプロジェクト』三島憲一編訳、岩波現代文庫、2000年。

ヘニス、ウィルヘルム『マックス・ヴェーバーの問題設定』雀部、嘉目、豊田、勝又訳、厚生閣恒星社、1991年。

ヤスパース、カール『マックス・ウェーバー』樺俊雄訳、理想社、1965年。

加藤節『南原繁の思想世界 原理・時代・遺産』岩波書店、2016年。

野口雅彦『闘争と文化』みすず書房、2006年。

松尾哲也『神々の闘争と政治哲学の再生』風行社、2018年。

キーワード：南原繁、マックス・ウェーバー、価値論

(MURAI Hiroshi)

